

総会記念講演

県立自然史博物館に期待すること

神奈川県立生命の星地球博物館 名誉館員 高桑正敏

要約 清 邦彦



神奈川県立生命の星地球博物館
名誉館員 高桑正敏先生

私は1947年に生まれ昆虫少年として育ちました。大学卒業後、友人らと雑誌「月刊むし」というのを作りました。その後1985年神奈川県立博物館の昆虫担当になりました。そのあと博物館が手狭になったものですから、1995年自然系博物館として「生命の星・地球博物館」ができたのでそちらに移りまして、昨年まで学芸員としてやってきました。私の研究対象はハナノミとカミキリムシの分類学的研究と昆虫を使っての生物地理学的研究です。

自然史博物館の使命と役割とは何かと言いますと、一般的には博物館資料を収集、保管、研究、展示をして、普及啓発活動をして科学の進展と教育に寄与するということですね。ただそれぞれの個別の館によって使命は違ってくると思います。私がいた生命の星・地球博物館では、地球と生命という大きなことをまず掲げていますけど、当然神奈川を中心に、ということも入れました。それから社会的貢献を行なうということも入れてあります。

博物館資料というのはすごく大事です。実物標本、レプリカ、正確な模型、写真集、文献、こういったものを収集することから博物館活動は始まります。静岡県立自然史博物館に期待することですが、まずふさわしい使命というのをぜひ掲げてください。そして当然ですけども地域博物館としての役割も果たすべ



月刊 むし 0号

きでしょう。静岡県という守備範囲の博物館資料を徹底的に集めていただきたい。

ここで静岡県という地域のすばらしさといったものから静岡県立自然史博物館に期待することを申し上げたいと思います。

まず日本列島の中心に位置している、ということは最も日本を代表する平均的な生物相を示していると考えていいと思うのです。日本というのは4つのプレートが集まっている所ですが、そのうちの3つが重なるという世界でも珍しい所、丁度ここが静岡です。構造線というものから見てみますと、フォッサマグナ帯の南西部に位置し、西縁を走る糸魚川静岡構造線が静岡に達している。それから中央構造線ですね。地形の傾斜から見ると、南アルプスはすごい急峻な地形をしています。それだけ多様な環境を持っているわけです。植物区系から見てみますと、静岡県はフォッサマグナ地区の一部に入っていて、襲速紀（ソハヤキ）地区の東縁に当る、なおかつ日本海地区にも近い、そういった違う要素が接し合った所に位置している。

都府県の中で、北海道を除いて、12番目の面積を持っている。地表面積というのを考えた場合にはもっとあると思います。海拔差は

どうかというと、ゼロメートルから富士山の3776メートルまでいっている。ナンバーワンです。あとは東西に長いということ。新幹線がなんと6駅もある。南北にしたってそうですね。南アルプスがあって、富士火山があって、伊豆半島があって、ズーツと海岸線が長く、そういうような特徴を持っている。静岡県の恵まれた地域特性から想定できることとしては、生物環境が極めて多様なんでしょうということだと思います。たくさんの生物がすんでいる所だろうと思います。

今度は静岡県のチョウの分布相ということからその話に向かってゆきたいと思います。まずひとつは、ある特定の気候帯というか植生帯に分布するもの。ヒメキマダラヒカゲというチョウもそうですけど、山地、ブナ帯に広く分布している。こういう分布は非常に分かりやすい。ベニヒカゲというのは高山蝶としてよく知られている。クモマツマキチョウも。こういった高山帯、亜高山帯に分布しているものは、静岡県の高い所にわずかに残っているというような分布型をしています。

しかし、そういうふうにきれいに植生帯とか気候帯でもって分けられないような分布をしているものもたくさんいます。まず富士限定型、富士山周辺だけにいるという種類ですね。キマダラモドキとかホシチャバネセセリというチョウは、富士山周辺にはいるけれども、静岡県の他の地域には分布していない。それから逆に、西側にしかいないようなチョウもいます。ヒメヒカゲというチョウは三河高原を中心とした所の方にしかいない。

「いない」ってところで着目しますと、静岡県には分布しているけれども、富士周辺には分布していないものが多数あります。ダイセンシジミ、キバネセセリは伊豆半島から箱根、富士には分布していない。静岡県の真ん中付近にはいるものもあります、両サイドにはいるけど。ホシミスジは富士周辺からと愛知県境の方にいるけれども、この辺にはいない。ギフチョウ、ウラミアカシジミも静岡県の真ん中辺の大部分の所でいない。なぜかいないんです。

「いる・いない」のはなぜか、生物の環境がきわめて多様だからでしょう。チョウというのは飛ぶことができますから、どんどん分布



アカハナカミキリの分布を説明する高桑先生

を広げていって、みんな同じように分布していったっていいじゃないか。ところがそうではない。地域によって相がずいぶん異なるんですね。静岡県という一つの県の中にあっても違って来る、だから箱庭的に地域生物相が異なる。

今度は他の分野ではどうだろうか。例えばチャボハナカミキリやカラカネハナカミキリは伊豆半島と富士山と南アルプス周辺には分布しているけれど、なぜか遠州の方にはいない。逆に、富士山にいないものもあるんです。カタキハナカミキリやブチヒゲハナカミキリは伊豆半島にも富士山にもいない、わずかに南アルプスにだけいる。アカハナカミキリは最も普通な種類ですが、なぜか遠江の方には分布していない。この辺が静岡県というものを考える上で面白いことです。

分布図の作成というのは地域自然史を解明する原点だというふうに考えています。同じような分布型が出てきたとするならば、それは偶然でもなく、調査不足でもなくて、じつは自然史の結果そうだったんだろうということが想定できるということです。自然史の運命共同体として一緒に時代をすごしてきたというのがわかるのです。

こういうふうに静岡県のすばらしさ、種多様性ってものを見てきて期待することは、自然史博物館を挙げてこのすばらしい自然というものを解明してくださったら、また調査のセンター的な役割、機能を担っていただけたら、ありがたいなと思います。